

浄土

monthly JODO



2018
May

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

写真の本は一九三〇年にドイツのライプツィヒで発行された、インゼル文庫の中の一冊『Das kleine Buch der Vögel und Nester』（以下：鳥と鳥の巣）である。フリッツ・クリーデルによる美しい細密な小鳥とその巣の絵が収められている。

ライプツィヒは音楽の街（バッハ、メンデルスゾーン、シューマンが活躍）である。ドイツに留学した森鷗外が一年ほどすごした街でもある。と同時に出版、印刷の街としてもよく知られている。ライプツィヒが出版、印刷の中心となったのは、それまでの中心地であったフランクフルトが、一七世紀に神聖ローマ帝国の反カ

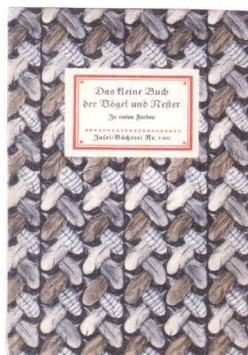
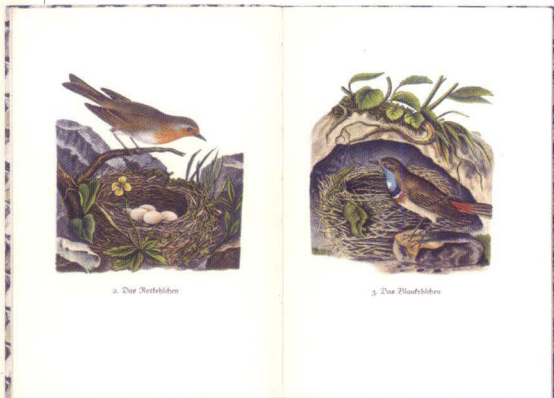
トリックの書物の検閲を受けるようになり、統制を嫌った出版業社が検閲のゆるいザクセン選帝侯領のライプツィヒへと続々と移転したからである。

インゼル文庫の歴史は古い。創刊は二年であるから、ふたつの世界大戦をくぐり抜けている。第二次世界大戦後、ドイツが東西に分断された際には、西ドイツのヴァイスバーデンに支店を開き西側での活動も始めた。九〇年の東西ドイツ統一の翌年にはこのふたつのインゼル文庫は合併し、二〇一〇年に再創設された。これまでにこの文庫は約一八〇〇のタイトルが発行されている。『鳥と鳥の巣』は百番目にあたる。すべてをを見ることは不可能だが、

この本を入手した店で十数冊、目を通した。どれも表紙はテーマにそった絵を幾何学的に配置したもので、文字はフラクトゥールというひげ文字の書体で統一されている。

貝殻、鉱物、キノコ、植物、動物といった博物的な図鑑から、宗教的な絵画、文字だけの本とジャンルは多岐にわたっている。図鑑類はその細密な絵と造本で、美術品のようである。

『鳥と鳥の巣』は、五五年にすこし体裁を変えて再出版されている。



天地 185 ミリ、左右 121 ミリ。表紙は厚紙の上製本。本文 52 ページ。鳥とその巣の細密な絵が 32 点収録され、巻末にそれぞれの鳥の解説がある。88 年前の本だが、傷みもなく保存状態は良好。右はインゼル文庫のシンボルマーク



浄土

2018/5月号 目次

世界はもっと豊かだし 人はもっと優しい	森達也	2
連載 響流十方	袖山榮輝	12
連載 江戸の川を歩く ②⑩	森 清鑑	16
連載小説 渡辺海旭 ⑧⑦	前田和男	22
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
表紙写真＝鬼海弘雄
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会主催 平成二十九年

平成二十九年六月二十二日

於 増上寺慈雲閣開催

森達也氏講演会

世界

はもつと

豊か
だし

人

はもつと

優しい

その
一

僕の自己紹介をします。実はこの自己紹介は話のつながりになるので、結構大事なんです。そもそもテレビのディレクターでした。報道系とドキュメンタリー系を主なフィールドにして日々を過ごしていました。九五年、オウム真理教の地下鉄サリン事件が起きます。今日は年配の方もかなりいらっしゃるから、当然覚えていらっしゃると思いますが、とにかくもうメディアはあの時期オウム一色でした。

テレビの場合は早朝から夜中までオウムの特番だらけで、そんな時期に僕はテレビ業界にいたわけですから、当然ながら、もうオウム以外の企画は通らないのです。「何でもいからオウムの企画を持つてこい」という時期でした。

僕はドキュメンタリーが主な活動領域なので、ドキュメンタリーを撮るしかない。でも、ドキュメンタリーですから、被写体が必要です。では、被写体は誰か。麻原とか幹部信者はもうほとんど捕まっています。撮れません。

では、残っている信者を撮ろうと思って、残っている信者を被写体にしたドキュメンタリーを撮り始めたのです。これはフジテレビで放送する予定でした。

ところが、撮り始めて三日たった段階で、上層部から指示が来て、最終的には撮影中止になりました。ただ、それは結局は映画になるわけです。「A」という、僕の最初の映画です。そして「A2」という続編もできました。

なぜその僕の作品がテレビから拒否されたのか、「これは放送できない」と言われたのか、そこがポイントなんです。その時期、僕はわかりませんでした。今はわかります。

なぜならば、映画というのはテレビとは違います。たくさん違いはありますが、一番大

きな違いは、見てもらって、その場で感想を聞いたりできるわけです。テレビはなかなかこれができるせん。

いろいろなところで上映しますから、いろいろなところで感想を聞きました。一番多い感想は、「オウムの信者があれほど普通だったとは知りませんでした」という感想です。普通という言葉の定義は難しいけれども、こう言いかえてもいいです。オウムの信者は森達也よりもはるかに善良です。純真です。優しいです。これはテレビではNGです。出せません。

テレビだけではありません。あの当時、もしかしたら今も、メディアではオウムを語るときに使えるレトリック、論理は二つしかないのです。一つは「凶暴凶悪な殺人集団」、もう一つは「麻原に洗脳されて自分たちの感情や判断力を失った危険な集団」、どちらかです。

この二つに共通することは、彼らは自分たちとは違う存在であるということです。自分たちとは違う存在であるからこそ、あれほどに凶悪な事件を起こしたのだと思うことができるわけです。

でも、僕の映像を見ると、「ああ、自分と何も変わらない」と思ったことでしょう。彼らは普通です。誰もが気づくわけです。これはテレビとして困るわけです。

なぜテレビが困るか。テレビが困るというよりも、視聴者が怒ります。もし僕の映画をテレビでオンエアしたら、始まって数分で視聴者から抗議の電話、メールが殺到するでしょう。

次に、もし民放であれば、スポンサーからも苦情が来ます。視聴率はもう最悪でしょう。これをテレビでやることには何らメリットがないのです。

だから、テレビがこれを拒否したことも当たり前と言えは当たり前ですが、結果として、メディアは、テレビは、「凶暴凶悪な殺人集団」あるいは「洗脳された危険な集団」という、こうした報道しかしてこなかったのです。

当然ながら、それは刷り込みになりますから、社会全体がそれを何度も何度も、しかも、あれほど異常な報道が一年以上続きました。

この後遺症がたくさんあります。本当であれば、あれほどに純真で善良で優しい人たちが、なぜこれほど凶悪な事件を起こしたのかを考えるべきだったのです。

でも、結果的には、社会とメディアはそれを拒否しました。凶暴凶悪だから人を殺した。洗脳されているから人を殺した。このほうがわかりやすい。そちらのほうの論理に改修してしまっただけです。

その結果、どういう後遺症が起きるか。この日本で、これほどに凶悪な、理解不能な人が、組織が、自分たちのすぐそばにいるという感覚を持つてしまったのです。つまり、不安とか恐怖といった感情が強く刺激されたわけです。

その結果として、いろいろな変化が起きます。言葉にすれば、集団化という現象です。つまり、集団としてまとまりたいという意識です。不安や恐怖を持ったときに、人はどうなるか。一人が恐くなるのです。皆んなと手をつなぎなくなる。連帯したくなる。そういう気持ち芽生えます。これはごく自然な気持ちです。

そもそも人類の祖先、これはいろいろな説がありますが、一番今新しい学説としては、ラミダス猿人だといえます。これはアフリカにいました。四百五十万年前、これはもう猿人ですね。最近その化石が見つかったのですが、木の上と地上とを行き来していたらしいです。

彼らが地上において、二足歩行を始めて、人類の先祖になるわけですが、このラミダス猿人は、地上においてきて二足歩行を始めると同時に、もう一つ、それまでやらないことをやりました。二足歩行をするから、手が自由に使えるようになって、道具をつくることができるようになった。さらには、手を使うことで大脳が刺激されて、大脳が発達した。

そして、もう一つは、群れをつくったのです。それまでは群れをつくる必要はなかったのです。なぜならば、樹上には天敵がいなかったからです。ところが、下においてくると、アフリカ大陸ですから、大型肉食獣がたくさんいます。一匹だったら食われてしまうのです。では、どうするか。皆んなで集まる。群れになれば、大型肉食獣も簡単には襲ってきません。夜寝るときも、誰か見張りに立っていれば、近づいてきたら知らせることができま

す。あと、もしかしたら狩りのときも集団のほうが効率がいいのです。というわけで、人類は群れる動物になりました。それまで樹上では群れなかったのです。単独生活です。でも、地上においてきて、進化する条件として、群れることを覚えたのです。

群れる生物はたくさんいます。イワシとか、メダカとか、カモとか、ムクドリとか、羊とか、カモシカとか、たくさんいます。彼らには共通項があります。弱いことです。弱い

から群れるのです。

強い動物は群れません。トラでも、ワシでも、シャチでも、フクロウでも、強い生き物は群れる必要はないのです。弱い生き物は群れる。

人間はどうか。翼もない。爪や牙は退化した。泳ぎも下手、足も遅い。こんな弱い生き物はいません。僕がもしここで今、裸でチンパンジーとけんかしたら、絶対負けます。

これほど弱いということは、群れる本能がとても強いということです。僕たちはもう群れないことには不安で仕方ないのです。そういう生き物になってしまった。これは、言いかえれば社会性です。人間は社会の中で生きる。一人では生きられないのです。

『ロビンソン・クルーソー』という小説がありますが、ロビンソン・クルーソーは漂流して無人島にたどり着いて、一番狂喜乱舞したシーンは、自分以外の人の足跡を見つけたときです。結局、これは落ちがあつて、自分の足跡だったのですが。そのあとにフライデーという現地の土着の人と出会うのだけでも、一人で生きることがどれほどにつらいことか。やはり他者と交わらないことには生きていけない。そういう生き物になってしまいました。

群れにはいろいろな属性があります。皆さん、例えば水族館なんかに行ったときに、イワシの群れを見たことがあります。何千匹の群れだけでも、一つの生き物のように動きます。あるいは映像なんかでも見ます。鳥の群れなども同じで、全員が同じように動きます。

つまり、こういうことかという、群れは同調圧力があるのです。皆んなと同じように

動く。だから、言いかえたら、てんでばらばらに群れが一匹一匹動いていけば、これは群れにはなりません。群れの意味をなさないので。天敵の襲撃に備えて群れるわけですから。そんな勝手に動いていたら、自分が食われてしまいます。だから、とにかく周りと同じように動きます。そうした本能がとても強い。それが同調圧力です。

だから、不安や恐怖を持ったとき、人は集団化を起こします。そもそもそういう生き物なんです。それが不安や恐怖を持ったときにより強くなるのです。

それが日本では一九九五年、地下鉄サリン事件をきっかけに発動します。皆んなで一緒になりたい、連帯したい、手をつなぎたい、そうした気持ちがとても強くなります。

これ自体はそんなに悪いことではありません。例えば、東日本大震災。あのときもそうでした。「絆」という言葉が流行語大賞にノミネートされました。まさしくあれがそうです。不安や恐怖を持ったからこそ、皆んなでつながりたい。それはもう責められることでは何でもない、当然のことです。

でも、同時に、群れることには副作用があります。弊害があります。まずその一つが暴走することです。なぜ暴走するのか。同調圧力が強いからです。同調圧力が働く。皆んなが走り出したら自分も走る。皆んなが右に曲がれば自分も曲がる。そうした傾向がとても強くなるのです。

群れは群れの中で異物を探したくなります。自分たちと違うものです。なぜか。自分たちと違うものを探せば、自分たちは多数派になれるわけです。より強く連帯できる。だから、群れは違うものを必死に探します。この場合、違う理由は何でもいいのです。ちよっ

と皮膚の色が違う、ちょっと言葉が違う、違う神様を信じている。理由は何だっていいのです。とにかく自分たちと違うものを探したくなる。そしてそれを皆んなで排除したくなるのです。

これは、今聞きながら思った方がいるかもしれないけれど、学校のいじめと構造はほぼ一緒です。要するに、いじめられたくないからいじめのわけです。多数派に回りたいからいじめ。いじめというのは常に多数派が少数派に対して行います。逆は聞いたことがありません。それが社会全体で起きる。なぜいじめがなくならないのか。よくそういった声を聞くけれども、当たり前です。社会全体がもうそうなっていますから。

次に群れは、集団はどうするか。強いリーダーが欲しくなります。なぜか。イワシとかカモの群れはまだ本能が鋭いですから、周りの動きを察知することができます。だから、彼らはそれに合わせて動くことができます。でも、人間の感覚は進化の過程ですっかり鈍くなりました。そのかわり、人間は言葉を使うことができます。言葉がかわりになったのです。つまり、集団化が強くなればなるほど、人間は言葉が欲しくなるのです。

どんな言葉か。指示です。「前へ進め」とか、「全体とまれ」とか、「右へ行け」とか、皆んながそれを求め始める。ということはつまり、指示を発する強いリーダーが欲しくなるのです。

次にどうするか。敵を探したくなります。なぜならば、自分たちにとって共通の敵を探すことが一番連帯できるからです。不安と恐怖でつながっているのです。その不安と恐怖、つまり自分たちにとっての害となる存在を見つけたという気持ちが必要になります。

敵がない場合、どうするか。つくってしまいます。ここまでの話は、九・一一のあと
のアメリカを例にすれば、一番わかりやすいでしょう。

二〇〇一年九月十一日、同時多発テロがありました。そのあとアメリカはどうしたか。
まずは愛国者法という法律をつくります。これは要するにアメリカ国内の異物を探し出す
法律です。その異物は具体的に言えばイスラム教徒、あとは例えばスーザン・チョムスキー
のような反体制の知識人、これを標的にします。

次にどうするか。強いリーダーを求めます。当時はブッシュ政権です。就任時は史上最
低の支持率でした。ところが、一気にブッシュの支持率は跳ね上がります。

次に、敵を探します。まずはアフガニスタン、ここがアルカイダと連携しているとい
うことで、アフガニスタンに攻撃を仕掛けました。

タリバン政権を崩壊させたあとにアメリカはどうしたか。イラクでした。イラクのフセ
イン政権が大量破壊兵器を隠しているということで、戦争を仕掛けます。

このときは国連で激しく反対したのがフランス、ドイツ、中国です。つまり、まだ査察
をやっている最中なんです。何で今アメリカは攻撃するのだと、国連では激しく反対しま
した。

でも、アメリカは攻撃に踏み切った。なぜならば、アメリカを支持する国もあったから
です。具体的には、イギリス、スペイン、オーストラリア、そして日本です。

日本は小泉政権です。特に日本は一番強くアメリカをサポートします。安全保障理事国
に対して日本がいろいろとネゴシエーションをしたというのは、当時の外務省関連の本に

書かれています。何とかアメリカに協力してくれと。日本はアメリカにとってみれば本当に都合のいい国です。

その結果アメリカは、これだけの国が自分を支持しているということで、イラクに戦争を仕掛けます。フセイン政権はあつという間に瓦解して、その後どうなったか。大量破壊兵器はどこからも出てこない。ブッシュ政権の捏造でした。それがわかりました。

でも、結果としてイラクはどうなったのか。国はほぼ形をなさなくなつて、イスラム国が誕生します。今後はイスラム国の脅威が引き金になって、世界中に不安と恐怖がまき散らされることになりました。

その結果として、世界中で特にヨーロッパで右派政権が強くなります。要するに、右派というのは強いリーダーであり、敵を探し、異物を、つまり移民とかを排除したり、全部つながってしまうのです。

アメリカの場合、こうやってグローバルに展開したわけだけでも、実は同時多発テロの六年前に日本も、九五年サリン事件をきっかけに、そうした状況になっていたわけです。進んでいました。

(つづく)

森達也(もりたつや)

ドキュメンタリーディレクター、ノンフィクション作家。明治大学特任教授。

著書

「A」撮影日誌―オウム施設で過ごした13カ月(現代書館)、『放送禁止歌』(解放出版社)、『世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい』(晶文社)、『自分の子どもが殺されても同じことが言えるのか』と叫ぶ人に訊きたい…正義という共同幻想がもたらす本当の危機(ダイヤモンド社)

露の身は こゝかしこにて きえぬとも

こゝろはおなじ 花のうてなぞ

【法然上人】

はかないつゆのようなこの身が、こちらやあちらや、どこで亡くなってしまったとしても、心は同じ蓮台、きつと浄土でお会いできることでしょう。

（伊藤真宏著『法然さま 二十三のお歌』（なむブックス20、浄土宗）より）

「さりながら」のその先に

江戸時代の俳人、小林一茶の句文集『おらが春』に、

露の身は露の身ながらさりながら

という句が収められている。文政二年正月元旦からの一年間、一茶の身の回りの出来事を俳句とともに綴ったのが『おらが春』である。晩婚であった一茶は齢五十半ばにしてはじめて子どもを授かった。しかし、その子は生まれてひと月足らずで亡くなった。翌々年(文政元年)の五月、第二子となる女の子「さと」が誕生した。さとは無事に成長し年を越した。『おらが春』という題名には、一家三人で無事に新年を迎えることができた喜びが込められているのだろう。ところが、この世というものはじつに意地悪にできている。その年の六月、一茶たち家族が住む信州信濃の柏原を天然痘が襲いかかった。天然痘は一茶の娘も見逃さなかった。さととはあつという間に亡くなった。一歳余りの人生であった。

古来、生きとし生けるものの「いのち」の儚さについては、一滴の朝露が太陽の光にたちまち蒸発してしまう様子になぞらえ、「露の身」と喻えられてきた。私たちはことある毎にいのちの儚さを思い知らされ、人間がその例外でないことも重々承知してきた。しかし、一茶はわが子の死に、人のいのちが「露の身」

であることは分かっている、それが道理であると分かっているのだけれども、そのことに心が追いつかないのである。そして、その心情を「さりながら」と詠んだ。人としての情があればこそ辛くて切ないのである。

去年の五月、近所の寺の副住職が極楽に往生した。私と同年で享年五十三歳。三年に及ぶ闘病生活であった。彼とは自他ともに認める大親友であり、三十年以上にもわたる付き合いがあった。彼の死から一年が経つ今も、ふとしたことで彼を思い出し涙が出そうになる。とはいえ、彼の不在を埋めなければならぬ現実が次から次へと追って来る。泣いてばかりもいけない。

彼の寺は近所だから何かと用があつて顔を出す。御両親である御住職ご夫妻は、お会いする毎に、「息子のためにまだ何かできることがあるのではないか」とその切ない心情を口にし涙ぐむ。まさに「さりながら」である。我が子を失った悲しみは親友を失った悲しみの比ではない。

儚いいのちを御仏はどう考えているのだろうか。そもそも仏教はこの世に生を受けた以上、いのちが儚いことは誰にも変えられない道理であると考え。でも、だからこそ御仏は「さりながら」と嘆き悲しまずにすむ世界が必要だとお考えになり、儚きいのちを永久のいのちに変え、みなが再び集える世界を創

り上げた。それが阿弥陀仏の西方極楽浄土である。

一茶を廻ること七百年近く前、私たち浄土宗の開祖、法然上人もまた「露の身」と詠み込んだ一首を残している。冒頭の一首で、上人はこの歌を前の関白九条兼実を送っている。兼実は上人に深く帰依していた。詳細は省くが、上人は晩年、京の都から四国へと流されることになった。これが今生の別れとなるかもしれないと思う兼実に、上人は念仏往生の信仰のありようを歌に託したのである。

お互い儚く消える「いのち」であるにしても、西方極楽浄土の阿弥陀さまは私たちに再会の場を与えてくれる。そればかりか二度と離れ離れにならぬよう永久のいのちを与えてくれる。お念仏を称えていれば、私もあなたも極楽浄土の蓮の花の上に生まれ変わることができるのです。お浄土でお会いできます。西方極楽浄土を目指しましょう。そのように呼びかける歌である。

この世において「儚いいのち」は紛れもない道理である。さりながら、その道理の先に「浄土の再会」という仏の世界の真理が待っている。「さりながら」は超えられるのだ。法然上人は、そう詠んでいる。

(袖山榮輝)

江戸の川 を歩く

第二十回

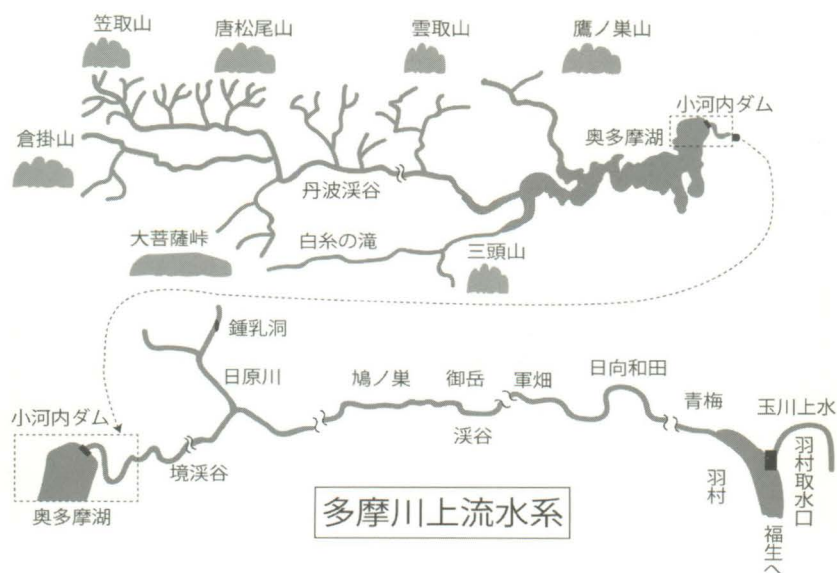
江戸ウォーカ―

森清鑑

多摩川

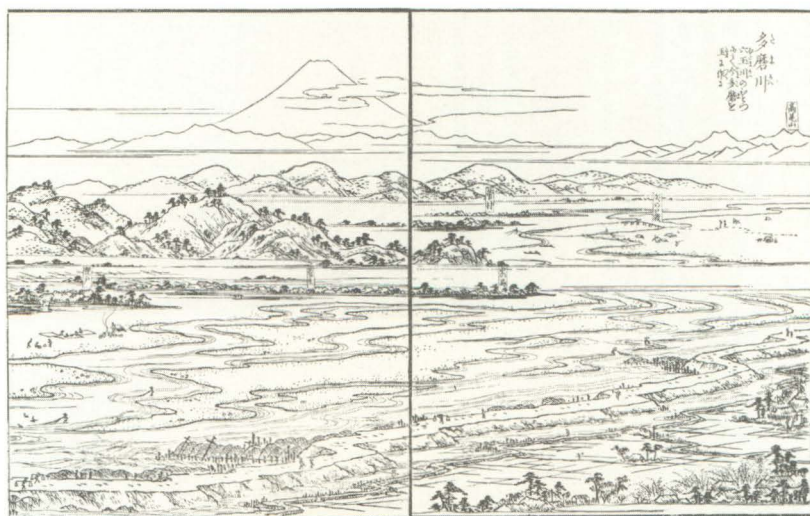
多摩川こそは江戸の母なる川である。この川は江戸市中へ飲料水をはじめ、作物を育てる灌漑水を提供し、鮎魚をはじめとする豊富な漁場資源をもたらし、そして、その上、貴重な自然環境そのものである。そして地政的には大江戸領域を守る最後の外堀ともいえる。家康は一五九〇年江戸に入府すると大都市構想実現策を推進するが、多摩川の治水工事もその一つに含まれる。大洪水の暴れ川として大きく蛇行していた流れをより直線的に変え（瀬替え）、連続堤防を整備。一五九七年には、早くも灌漑用の、「六郷用水」の掘削を命じている（粕江から大田区に至る）。多摩川の治水事業は江戸時代を通じ実施されており、その動きは今日まで継続されているといえる。

多摩川流域は、古代人にとっても母なる川。川沿いに残る、無数の古墳がその証左である。江戸の人々は、多摩川を玉川と表記する場合が多いが、これは山城や紀伊にある玉川と合わせ、六玉川と呼んでいたためである。



水源・水系

多摩川の水源は、奥多摩をぐるりと囲む秩父山地。笠取山・唐松尾山の南斜面、大菩薩嶺の東斜面、雲取山南斜面から湧き出た幾筋もの流れ。笠取山・唐松尾山の南斜面各所から湧き出る複雑な流れがひとつになり、そこへ倉掛山東斜面から湧き出た流れが加わる。奥多摩養魚場。少し南に下ると、大菩薩嶺北斜面から湧出した幾筋もの流れが一つになり加わる。そして丹波溪谷を形成し、東へ流れる。さらに南から幾筋かの流れを加え、今度は雲取山の南斜面の各所から湧き出た流れが北から流れ込む。これらの源流が奥多摩湖を形成するのである。近代にできた奥多摩湖を上から俯瞰すると、まるで龍が横になっているように見える。これは昔の流れの姿がそのまま広がって湖になっているという印象。そこに白糸の滝辺りからのこれまた幾筋もの湧出水がまとまり、三頭山からの流れも加わって湖に流入する。さらに鷹巣山南斜面から湧き出た幾筋もの流れが一つになり南下し湖に流入する。湖の幅は、広がりをみせる。

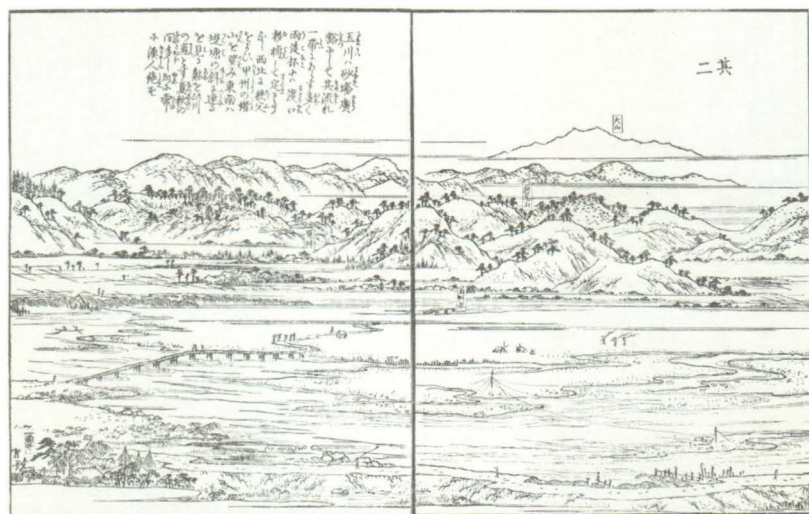


奥多摩湖から東へ

現在の小河内ダムから出た本流は、蛇行しながら東へ進む（境溪谷キャンプ釣り堀場）。そこへ、太平山南斜面から湧き出た水が南下。日原鍾乳洞を形成。そこに別の雲取山東斜面からの幾筋もの流れがまとまり合流。そのまま南に下り、日野明神社を経由して本流に加わる。これが日原川。そして本流は、蛇行しつつ、溪谷を縫いながら鳩ノ巣に達する。ここから蛇行が緩やかになり、御嶽へ。この間も、幾つかの流れが北から加わっている。森林、溪谷、蛇行。やがて流れは、二俣尾、日向和田を通過。青梅に達する。ここまで最高の自然溪谷美が展開されているのである。この辺りから川幅が広がり、広い河川敷を形成していく。そして羽村に着く。

玉川上水

家康は、江戸入府前に早くも上水路（飲料水）の掘削を検討している。最初にできたのは小石川上水。その後、江戸の埋立て開発にともない、一六二九年に神田上水路が完成。そして一六五二年に幕府は、多摩川



◆雪旦：江戸名所図会：手前に連続堤、向こうに多摩丘陵、そして富士。右上、高尾山。丹沢左端の大山も見える。所々に橋が架けられ漁がなされている。

の水を江戸市中に引き入れる壮大な計画を立てる。工事総奉行は老中松平伊豆守信綱。工事請負人は庄右衛門、清右衛門兄弟。工事は翌年から始まり、その年の内に羽村取水口から四谷大木戸まで四三キロの素堀水路を完成させる。水路は武蔵野台地を這い上がるように進み、尾根筋を流れ、自然落下方式で四谷に達する。難工事である。四谷大木戸からは地下に潜り、石樋、木樋を繋いで虎の門まで敷設。江戸城、四谷、麴町、赤坂、芝、京橋に至る水道管を設置。江戸南西部一帯への飲料水供給網を完成する。この功績により、兄弟は玉川の姓を承り、二百石、永代水役に取り立て。そして松平伊豆守には、玉川上水の立川から領地、野火止へ（平林寺）と上水を引く権利が付与された。これが野火止用水である。したがって処の人々は、これを「伊豆殿堀」と呼んだ。

多摩川中流域

多摩川は、羽村からは大河川敷となり、福生ふっさに向かう。家康入府時は、この流れも度重なる大洪水で武蔵野台地の方へ大きく蛇行していたと推定される。それ

を瀬替え（蛇行部分のショートカット）によって現在の流れに変えた人が田中丘隅かきぐもである。彼は、多摩川を大河川敷に変え、下流まで連続堤を築造。大改造に挑む。これは全国の河川土木技術に大きな影響を与える。彼は多摩川だけでなく、荒川の改造など幕府治水事業に大きな足跡を残す。

多摩川のその後の姿は、江戸時代から現在と変わらない。雪旦は「江戸名所図会」で江戸期の姿を明瞭に伝えている。広い河川敷の中を多摩川は幾筋もの流れとなつて緩なしている。手前に連続堤が見え、対岸の山は多摩丘陵。背後に富士が控えている。誠にのびやかでスケールの大きな光景である。ところどころに橋が架けられ、州を行き来できるようになっている。あちこちで漁の特殊な仕掛けが見られる。

多摩川の鮎漁

多摩川は、上流から下流まで豊かな漁場である。多摩川の魚は縄文人の食糧源であった。領域の縄文遺跡からは魚骨、狩猟器具の類が多数発見されている。幕府は、漁業権の設定や網漁鑑札制度を設け、組織的な

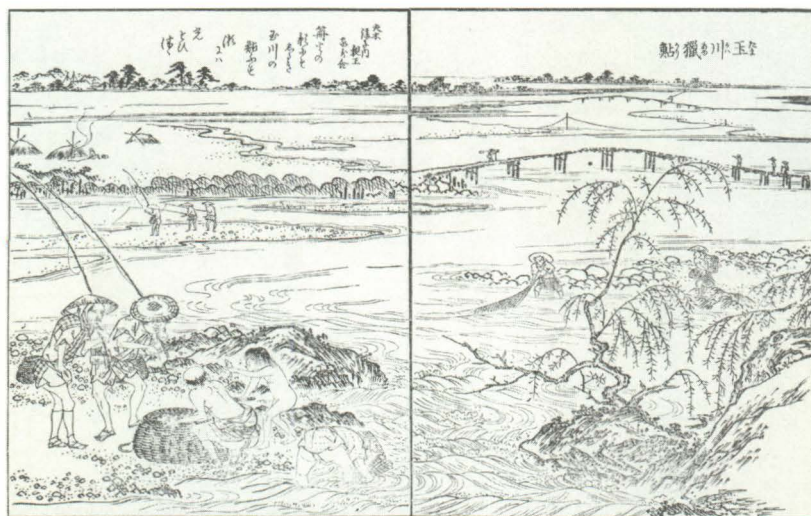
漁獲量増大を目指す。漁獲量の調整など見事なものである。漁法は、網漁、釣漁、築漁、鵜漁など約二十種類に及ぶ。鵜飼も行われていたのである。鮮度を落とさず江戸へ運べる多摩川の川魚の商品価値は高く、特に鮎は珍重された。

將軍家に献上する鮎は、御菜鮎と呼ばれ、取り仕切る役目が御菜鮎上納役。將軍の「鷹狩り」と同じく、多摩川御川狩御成が頻繁に実施される。

長谷川雪旦の江戸名所図会「多摩川の光景」には、釣漁や網漁をしている姿が必ず描かれている。

中流に向かって

多摩川は羽村から福生に着く。これからのいわゆる中流域では、川の左右から数多くの支流が流れ込む。これは武蔵野台地と多摩丘陵の間を多摩川が流れているためである。江戸湾に向かって左岸の武蔵野台地からは、下流に向かって順番に、残堀川、野川、仙川、丸子川、谷沢川が、右岸の多摩丘陵からは、平井川、秋川、谷地川、根川、浅川、程久保川、大栗川、三沢川の順に流れ込む。



◆雪旦：江戸名所図会：玉川鮎漁

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第八十七回

第三部

充実と稔りの白秋へ

禿筆を揮って、一部宗徒を断罪



「俠客坊主」の面目躍如

あしかけ十一年ぶりに故国へ戻った渡辺海旭に対する周囲からの「期待の寄せられ方」にも、海旭らしさがにじみでていた。

「浄土教報」（明治四十三年三月二十八日付け八百九十七号）には、海旭の神戸安着の報に接した「芳翠生」を名乗る人物から、こんな投稿が寄せられた。

「（前略）君を迎ふるに方り、君が学者として、将た経緯家として、更に又憂宗家としての才幹技能を今茲に列べ立てんは、君の榮を増すものにあらず、否餘りに迂なる仕方なり。吾人は寧ろ君の爲めに其滞歐中前には慈母を喪ひ、後には恩師を失はれたる君の心事を弔せんと欲す。一宗の爲め、学問の爲めとは云ひ乍ら又無常転變の理を悟りたる教家の身とは云ひ乍ら、身は異域に在りて愛別離苦を味ひたる君の胸中を想到する毎に、吾人は腸九廻

するものあるなり、思ふに、君が故師慈母の墓前に跪くのは、即ち君が帰朝の目的の半ばは達せられたる時ならむ。

吾人を以て忖度せば君が此等の計音に接して帰心矢の如くなりし事もありつらむ、而も尚留歐数年なりしは、君が一宗と学問とに忠なりし爲めにならずんばあらず、嗚呼此多年の労苦と悲痛の経験とに何を以てか酬ゆべき、一宗上下が君の帰朝を一日千秋の思をなして懇望しつ、ありし事を述ぶるは、蓋し其一たるべし。（略）

君の爲めに多くを語るは、其設言に非ざるを信ずるも、君の志に背くを知る、吾人は茲に一家言として君を迎ふる辞とするに非ず、再三繰返せる如く、一宗上下の挙つて君を待設けつ、ある事を挙げて歓迎の辞に代ふ」

海旭の学究ぶりを称賛はしていても、基調は海旭がいかに「義理と人情に厚い好漢」であるかを縷々述べているわけで、まさに海旭

を「俠客坊主」として歓迎せんとするものに他ならない。

かたや雲来に対する出迎えぶりは、海旭とは対照的で、宗門中枢からこんな破格の称賛を受けている。

「本宗の元勲たる黒田老師が僧中の獅子と称嘆して汎く宗侶に告げて以て大に之れを迎へられし萩原雲来師は悉達太子ならねど、勤苦六年の功空しからずしてドクトル・オブ・フィロゾフィー、てふ錦衣を纏ふて目出度帰朝せらる」(「浄土教報」明治三十八年十月二十三日付け六百七十号)

「悉達太子」とは出家前の釈迦の名。つまり雲来の留学の六年間は釈迦が修行した期間と同じであるとして、仏祖と同格扱いされているのである。

「一枝の禿筆」を刀代わりに

これに対して、当人たちの「帰朝の抱負と決意」も、それぞれの個性があらわれていて実に対照的である。

萩原雲来は、五年前の明治三十八年八月、帰朝に当たって次のような決意を「浄土教報」に書き送っている。

「小衲殆んど六年に垂なみんとする歲月の間、主として南北仏教の研究に力を竭つくし、其源泉たる聖典原本の研究に従事致居候。尚、帰朝後には西藏經典をも対読し得る様致度、現存せる世界の經文を比較研究し以て根本的に仏学界の薫蕕を弁折し仏学の大方針を講じ純聖教の顕揚の一助たらしめんとのみ竊ひそかに希望する所に御座候云々」(明治三十八年十月二日付け六百六十三号)

六年にわたる留学で究めた南伝・北伝仏教

の原典研究を成果に、帰国後は西蔵聖典解説チベットに邁進したいとの決意を披歴したもので、いかにも学究一途な雲来らしい。「悉達太子」と持ち上げられるゆえんでもあろう。

いっぽうの海旭は、帰国後、「浄土教報」主筆に復するが、同紙で抱負をこう開陳している。

「学識の以て講壇を賑すなく、弁才は以て教陳に盡すに足らず、疎懶にして驚鈍、事務に於ても計画に於ても百に一能あるなし。止むなくむば、幸に一枝の秃筆尚残れるあり。奮励或は之れを呵して、太宗に盡すの榮を得むか。

是の如くして、予は宗門が十載放浪の窮措大予が如きものをも棄てざる大度量と厚遇とに感激して起てり。起ちて而して吾が文壇の故郷浄土教報に復社せり。

復社せる予が方針は、依然として、教学一致主義なり。形式を排する精神主義なり。党

争に極力反対する、調和融会主義なり。かくて予は何人にも友たるべし。而も亦嚴然、何人に対しても、敵たるを断々として覚悟しぬ。(以下略)」「(浄土教報)明治四十三年九月五日付け九百二十号)

調和融会主義といながら、事と相手次第では、一枝の秃筆を刀代わりに仲裁に割って入ろうというのだから、まさに「侠客坊主宣言」である。

宗門内の権勢争奪を指弾

その、一枝の秃筆を海旭がさっそく揮う機会がやってきた。

「復社の辞」から二号後の「浄土教報」(明治四十三年九月二十六日付け九百二十三号)の一面において、壺月の筆名で、「無題数則」と題して檄文を飛ばしたのである。侠客坊主の面目躍如たる激越な内容であった。少々長くなるが、一部を抜粋して以下に掲げる。

「一部の宗徒よ。爾をは今社会か最欲する所に負きて、其最悪む所をなしつゝ、あるにあらずや。社会は今や爾に切実の伝道を要求す、而して爾は甚伝道に力めざる也。社会は爾に正義と慈悲と公正と同情との淵源を求むる、渴者の泉に於けるより甚しきものあり。而も爾は是等道義の根底を教ゆるに甚懶なるは何ぞや。

社会は今や無益陋劣なる小権勢の争奪を唾棄せむとす。而も爾は党争の毒酒に沈湎して狂舞する、是何の醜態ぞ。社会は今や男兒として闘ひ、紳士として活動す。而も爾の爲す所の陰險詐譎中傷讒誣、何ぞ箇の如く陋劣なる。

一部の宗徒よ。爾は実に世の欲する所に逆行して、其唾棄する所を嘗めて得々たらむとす。

爾等而して曰く、紀念伝道。而して曰く租恩報答。曰く何。曰く何。而も吾爾に問はむ。

爾等は果して党争・狂・選挙病の如きものを以て伝道を意味し、事業を意味し、中傷排擠はきせきの悪策を以て租恩報答を意味すとなすか」

海旭は、このまま筆を進めると内からふつふつと湧いてくる憤怒を統御できなくなると思つたのか、ここで白楽天の「城柳宮槐せいりゅうきゅうかい謾はしく揺落すれども 秋の悲しみは貴人の心に到らず」を『和漢朗詠集』から引き、「要路は落葉を知らない」と揶揄して憤怒の激流をやわらげんとしたが、漢籍の蘊蓄による鎮静効力もせいぜい十行ほどで、再び憤怒の奔流はいやますばかりであつた。

「爾は村長よりも微弱に破綻、会社の小使よりも尚憐なる、小権勢小位置を獲得せむかために、何ぞさまでに、苦辛酸澹たる。之か爲に何ぞ爾か堂々たる五尺の軀幹を勞する犬馬の如くなる。

実に爾は如何なる権勢よりも偉大に且牢強

なる、勢力を当然得べき地位にあるにあらずや。この勢力は何ぞや。爾か前なる信徒の貴き心なり。

爾是の如く牢て貴きものを得むとせずして彼が如き愚にして小なるものを得むとす、怜悯と機敏と術策とを生命とし倣とせる爾も亦頗小兒なる哉。

今の世は閑人を許すの世にはあらず。人は皆孜孜として其職業に力め、屹々として側目もふらず、労働す。

愚劣なる権勢争奪に腐心し、醜陋なる選挙運動に腐心し、而して排擠済と離間と讒誣とに腐心する一部の宗徒、閑何ぞ多きや。爾の閑暇は真に天下無類也。

小人閑居して不善をなし、坊主閑多くして俗悪なる愚劣事に盲動す。

教家にして最憫れむべく最危険なるものは復讐の執厚き徒なり。睚眦の怨も必らず報せむとする底の人也。

復仇の雲の前には同情の明月光なし。同情

一たび失して、百千の美德悉く失す。同情は一切を解決する鍵。復仇は万事を破壊するの本なり。

破壊の為に、紛擾の為に、混乱の為に、僧となれるものは、吾其復讐の心を責めず。但彼等にして平和と慈悲と成就の為に活動すといふあらば、是豺狼にして羊皮を着けたるもの也。天下の危険之より甚しきはなし」

大逆事件の衝撃

いやはや、「一部」という限定付きとはいえ、同じ宗門の朋輩を「羊の皮をかぶった狼」にたとえ、「坊主閑多くして俗悪なる愚劣事に盲動す」とまでこき下ろしてはばからないとは、なんとも過激である。

そもそも海旭は、指弾の相手をあくまでも「一部の宗徒」と限定してはいるものの、それは「筆禍」を回避するための巧まざるレトリックであって、おそらく宗門の要路およびその周辺にいる実力者たちをさしていると思

われる。もし、字義通りに「ごく一部の例外的な宗徒」であつたならば、ここまで筆舌をきわめて断罪する必要などなく、無視をきめこめばいいからだ。

それにしても、なぜ海旭は、ここまで激越な檄文を、宗門の機関紙のトップに掲げたのだろうか？

十一年ぶりの帰国からわずか半年たらずの『今浦島』であれば、故国の様変わりには当惑するのは当然であつて、であるがゆえに、事情が判然とするまでしばらくは静観と自重をするのがふつうである。ましてや十余年も宗門の経費で留学させてもらい、帰国すると宗門機関紙の主筆に復させてもらった「恩義」を考えれば、少しは付度をすべきである。ところが、そうはしなかった。そこが海旭の俠客坊主たるゆえんであろう。

むしろ『今浦島』だからこそ、半年で我慢の限界にいたつたのではないか。内にとどまつている人間にはえてして自らの実態が見

えないものだ。いつぼう遠く外にいて、しかも長きにわたつて不在だつた者には、内にとどまつている人たちの実態が否応なく見える。しかし、その海旭ですら、あと一年、二年たてば、「内側の人間」となつてしまい、いま自分がいる現実社会がばやけて見なくなつてしまう。したがつて、憤怒を爆発させるには、この時期しかなかったのかもしれない。

海旭は、欧州における文明・文化の十字路の留学先で、あるときはロマンチズムに酔つてワグナーに狂い、あるときはロシアの革命熱に当てられて闘士たちと意気投合し、またあるときは自由思想団のカトリック教皇派への不満に乗じて仏教の布教に腐心しながら、哲学博士の学位を取得、学識のみならず人としての器量を大いに広げて、X嬢との盟約を果たすべく勇躍、帰国を果たした。

ところが、海旭がX嬢との盟約を共に果たそうと期待を寄せていた宗門の朋輩たちの実

態を知って、愕然とさせられた。なんと朋輩連ときたら、内にこもって「党争」に狂い、宗門内の地位上昇を願って「選挙病」に冒されているではないか。さらに許せないのは、そう指弾されても当人たちは、それが「我が事」との自覚がない。だからこそ海旭の憤怒はいやまし、〃一枝の禿筆〃を刀代わりに揮うにいたったのであろう。

だが、海旭の〃一枝の禿筆〃が斬らんとしたのは、「一部の宗徒」の「党争狂」でも「選挙病」でもなかった。それは「仮象」ではない。真に斬らんとしたのは、「一部の宗徒」が「党争」と「選挙」にかまけてそこから目をそらしている「日本社会の大変」にあった。祖国は、海旭不在の間に、日露戦争に勝利し、維新の元勳・伊藤博文がハルビン駅頭で暗殺され、韓国併合へと向かい、別人の強者に変貌。いまや〃明治御一新〃に匹敵する百年に一度の「大変」を迎えつつある——そんな直感を海旭は抱いた。

そして、帰国して二か月後、海旭の「直感」が「確信」に変わる歴史的大事件が勃発する。なんと明治天皇暗殺を企てたという容疑で、幸徳秋水ら社会主義者・無政府主義者二十六名が検挙。そのうちには三人の僧侶がふくまれていた。また容疑をかけられた中には、新仏教同志会の仲間たちもいた。

想定をはるかに超えた祖国の「社会的大変」にどう向き合えばいいのか、海旭自身も深い悩みの中にあった。にもかかわらず、宗門の要路はそこから目をそらしていることが、海旭には何としても許せなかったのである。

(つづく)

法然上人鑽仰会[講演会]のお知らせ

講師 石丸晶子

法然上人とお弟子たち

いしまる あきこ

1935年東京都生まれ。国文学者、文芸評論家。東京大学文学部卒、同大学院人文科学研究科博士課程修了。東京経済大学名誉教授。著書に『面影びとは法然—式子内親王伝』(朝日新聞社)、『歴史に咲いた女たち—源氏の花 平家の花』(廣済堂出版)、『法然の手紙』(人文書院)、『お手紙からみる法然さま』、小説『月影の使者』(上・下)(浄土宗出版) ほか多数。



会場 東京芝大本山増上寺 慈雲閣
1F ホール

東京都港区芝公園4-7-35

地下鉄都営三田線御成門または芝公園下車徒歩5分

都営浅草線大門下車徒歩5分

JR浜松町徒歩10分

2018 6月22日(金)

午後1:30開場 午後2:00開演 (3:30終了予定)

会費 1,000円

当会会員無料

問い合わせ先

法然上人鑽仰会

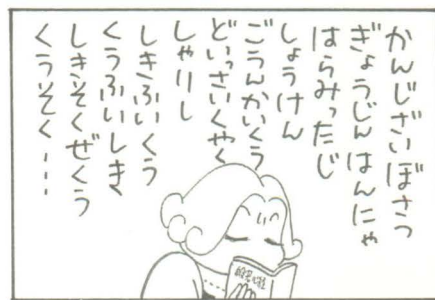
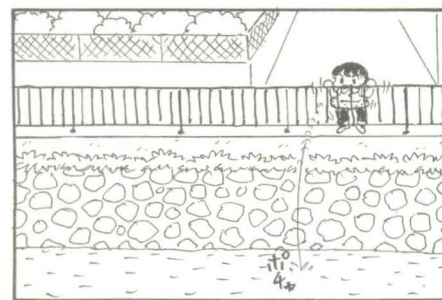
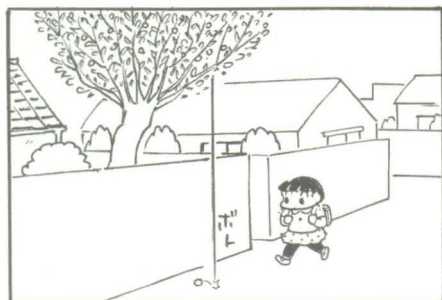
〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館 4階 tel 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

150

かい目

さっちゃんね

かまち♡ひろう



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)

編集後記

弥陀堂を二人で掃除施餓鬼来る 岱潤

小さいときから本に囲まれている生活にあこがれ、気がついたら自分の部屋は三方を本棚にしていた。そんな自分も読書の時間が作れない日が続き、イライラが募る毎日だが、全国大学生協連が大学生の読書時間を調べたところ、五割超が「ゼロ」と回答したそう。このこの調査はみんな見栄を張るもので、実際は六割、七割だろうというコメントまであった。以前若い人の引越を見ていると、本棚はともかく蔵書が全くないことに気がつき、唖然したことを思い出した。確かに現代の日本が、書物といった紙文化

が昔の話になり、電子化されたものに代わっているからかもしれない。こうした雑誌も、ネットで読めるようにして欲しいという要望も強い。しかし読書時間「ゼロ」は別の話だろう。端的に活字離れ、平和ぼけという気がしてならない。

戦時下のシリアで秘密図書館の記事を見つけた。戦場で本にかじりついている若者が多いという。彼らは「本を読むのは、何よりもまず人間であり続けるためです」と言う。シリア各地で戦闘が起きてこの春で七年。犠牲者は三十五万人、その三分の一は民間人である。方々ともない状況の中で、書物を読みあさり、自分自身を見失わないように努め、方々

が昔の話になり、電子化されたものに代わっているからかもしれない。こうした雑誌も、ネットで読めるようにして欲しいという要望も強い。しかし読書時間「ゼロ」は別の話だろう。端的に活字離れ、平和ぼけという気がしてならない。

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森厳寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光園寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭典(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 成田昌憲(世田谷・大吉寺)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 松濤泰彦(芝・寶松院)
 真野龍海(大本山清浄華院)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 村田洋一

浄土

八十四巻五月号 頒価六百元
 年金費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成三十年四月二十日
 発行 平成三十年五月一日

発行人 佐藤良純

編集人 長谷川岱潤

印刷所 株式会社 暁印刷

〒一〇五〇〇一一
 東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七
 FAX 〇三三五七八七〇三六
 振替 〇二八〇八・八二二八七

己の楽しみや仕事の中に、自分自身を見つめることさえ忘れてしまった我々がいる。どんな時でも読書はやはり必要だと思う。(長)

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と発送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

浄土宗の日常勤行式が
写経になった!! 写経後は
オリジナルの経本
にもなります。

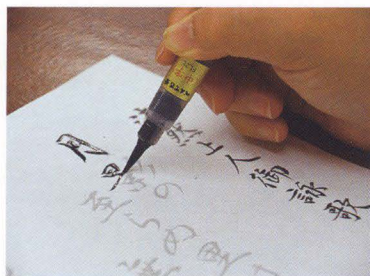


薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

宗歌「月かげ」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう!

当会オリジナル新商品!!

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。